

好き活のすすめ：

就活と推し活の間で、若者は好きなことを仕事にできるか

住澤 博紀

就活の比重が大学生生活において不断に大きくなってきている。私が日本女子大に赴任した90年代初頭には、3年生のゼミ合宿を3月に行くことも可能であった。しかし就活も前倒しに進行し3年生の後期から、あるいはインターンシップを含めると2年生から意識する学生が増えてきた。新入生がサークル活動に最初の1年間のキャンパスライフを満喫し、その後、単位取得と就活が最重要課題となるとすれば、大学とはいったい何かという話になる。

就活が、それぞれの学生の職業選択と将来像に結びついていれば、さらにそのために特定の大学や学部・学科を選択したということであれば、学生それぞれのキャリア形成の過程として、大学生活がきちんと位置付けられることになる。日本女子大は、理系や様々な資格職と結びついた、いわゆる実学系の学科が多いので、他大学に比べると、職業選択としての就活という学生が多いと思われる。それでも実学系の家政学部の学科でも、就職先をみると会社選択としての就活が多くみられる。職業的な自らの将来像がどこまで追求されているのだろうか。

そう考えれば、もともと大学や学部・学科選択そのものが曖昧であったことがわかる。私は河合塾など大手塾の元講師と議論する機会がたびたびあったが、80年代から大学選択が偏差値を基準とするようになり、また大学の管理主義が浸透して90年代には大学の個性がなくなり序列化して、結果として予備校講師が、それぞれの大学の「かつての」個性を紹介することになったという。教養や「知の創造」としての大学が衰退し、キャリア形成の場となった大学の内実が、学生の行動や選択に映し出されている。

将来的な職業像を持たず、イメージによる会社選択としての就活は、しばしば入社後にそのしっぺ返しを食らうことになる。21世紀初頭の不況期には、ブラック企業が話題となった。現在でもいくつかの特定企業が内部告発を受けメディアで報道されているが、働き方改革などによりブラック企業も改善され、厚労省の統計では3年以内の大学新卒退職者は、3割弱のままだが減少の傾向にある。

むしろ日経なども報じる、働き方などはホワイト企業ではあるが、新卒者のキャリア向上意欲を満足させられず、有能な若者ほど転職するという、いわゆる「ゆるブラック」企業の課題に焦点が当てられる。欧米の労働市場では広くみられることだが、日本ではまだ新しい現象である。こうした日本人のグローバル基準の人材は、おそらく少数派に留まるだろう。その背景には、個性や好きなことを求める子どもの時代の夢を潰してきた、日本の中等・高等教育にあると私は思う。

このことをデータで証明するのは難しいが、私のドイツの友人たちの子どもは、子どもの時代からの個性や好きなことを、職業教育や大学選択に生かして社会人になってきている。また海外の教育に詳しい人々も、子どもの個性をクラス、学年単位に規格化する日本の伝統的な学校制度に疑問を呈している。小学校低学年の子どもたちは、それぞれが制約

されない、自由な自分の夢を語るが、卒業する段階では、公務員や看護師、会社員など親を安心させる職業、あるいは逆にスポーツ選手など抽象的な将来像を描く。それが中学、高校、大学と進むにつれて、より安定を求める「就活」となる。

おそらく若者の間では、就活と推し活は対になっているのではないだろうか。SNSの発展により、小学高学年から20代の若者まで、アイドルやミュージシャンの推し活に夢中となり、その規模は1,000万人以上と推定され、エンタメ業界やライブは一大産業部門となっている。生活を維持するために就活の成果である職場には留まり、「本当の自分」を推し活の中に求めてゆく。推し活は、今や高齢者層まで及んでおり、単調な生活に潤いを与え、社会との接点を作り出す点で、有意義でもある。しかし若い世代が、就活と推し活のセットで自分の人生を決定してもいいのだろうか。

本来であれば、好き活、つまり自分の子どもの時代から好きだったこと、あるいは夢を、学校教育や青年期を通じて発展させ、自らの未来像を創っていくことが望ましいのではないだろうか。もちろんそれには限界やリスクがある。

2022年9月に封切りされた、さかなクンの自伝をモデルにした「さかなの子」という映画を参照してみよう。さかなクンとは、よく知られているように、好きを子どものころから追求して、それを生涯の仕事、日本を代表する市井のさかな博士となった人である。しかし映画では、さかなクン本人が演じる、もう一人の「さかなおじさん」が登場する。やはりさかなが好きで、家では多くの水槽に魚を飼っているが、周囲からは「変なおじさん」として知られ、社会の片隅で生きることを強いられている。

この映画と二人の「さかなくん」の話は、You Tuberの間で広く取り上げられ議論された。いうまでもなく、彼らも夢と好きを追求して、成功しなかったさかなクン達であるからである。吉本新喜劇の多くの若者、小劇場や役者をめざす多くの青年男女、地方の地下アイドル、各種の専門学校の多くの生徒たちも同じだろう。定職のない研究者の卵も入るかもしれない。この意味では就活と推し活を持つ人生は、無難でリスクが少ない人生選択かもしれない。

しかし社会全体としては、好きを追求する多くの若者、パイオニアを必要とする。社会に活気を与えるからである。日本にもそうした時代があった。4月5日に放送された、NHK BSのアナザーストリーズでは、渋谷の文化革命としてPARCOをとり上げた。今でいうブランディングであるが、アートディレクター、イラストレーター、コピーライターの3人の新進気鋭の女性にすべてを任せ、彼女たちは自分の好きを追求して、PARCOは新しい文化の発信地となった。こうしたことは80年代の元気なころの日本では、おそらくいたるところで、いろいろな人により行われていた。

好き活はもちろんリスクを伴う。私が推すある女優・アーティストは、自分に興味を持つこと、自分の可能性を幅広く発掘すること、そして根拠がなくても自分に自信を持つことが大事であるといっている。これらは欧米の若者の間では普通の特長でもある。これは自分探しではなく、自分の将来の職業像と結びつけた具体的な行動を意味する。大学生活こそこうした試みが可能な、人生の中で貴重な時期である。

(すみざわ ひろき 日本女子大学名誉教授)